

## 町長

## ひとりごと

64

齊藤

讓



花にあらしとはよくいったものだ。今年の春先は、ことのほか天候不順が続いたため、せっかくの花見も残念ながら当がはずれてしまった。この春に完成した光スポーツ公園の桜も、かなりの花を咲かせたのであるが、いかんせん昨年の秋に植えたばかりで、樹木そのもの力がないために弱々しくて、荒れ狂う風雨の前に、敢無く舞い散ってしまった。だが、あと二・三年経って、大地にしっかりと根を張ったときには、きっと見事な花を咲かせて、私達の目を楽しませてくれることであらう。その時は、さくら吹雪の花陰で、しみじみと心ゆくまで杯を重ねてみたいものだ。

▼春はまた、人事異動の季節でもある。この時期

あちこちの酒場は、歓送迎会でもちきりとなる。そこには決って、去る人、来る人、動かざる人それぞれが咲かせる悲喜こもごもの感情の花が、繚乱として咲き乱れるのであるが、時にはこの花園に、あらしが吹き荒れることもめずらしくないようだ。

ともあれ私もこの時期、いろいろな関係の歓送迎会に顔を出させていただいたが、行くところ花の咲き具合には、それぞれ濃淡のちがいがあつた。

▼町内各小中学校教職員の合同歓送迎会は、例年町と教育委員会が共催で、町民会館で行う習わしとなつてゐる。今年も退職者四名、転出者四名、転入者一名、名であり、その大半が出席してくれた。この席には町議会から正副議長をはじめ文教担当の議員のほか、各

## 先生ならば



小中学校PTA幹部にも出席していただいたので、とても賑やかなものとなつた。勇退者の中には、光中の校

の演壇に立って、卒業生一人一人の魂を揺さぶるような感動的なスピーチを残された。いま目の前の先生は、すっかり回復され血色のよくなった顔を綻せて、周囲の人達と静かに談笑している。この時私は、こんな顔を大事を為し遂げた人の顔というのではないかと思つた。鎌形先生は、家庭の事

長として四年間学校経営に心血を注ぎ、光中の名声を大いに高めた越川鎌三先生や、生徒指導のベテラン鎌形トク子先生がゐる。

▼越川先生は、昨年の暮頃から今年のはじめにかけて大病を患つたが、まるで不死鳥の如くに蘇り、卒業式

情で定年前の勇退である。私が酒を注ぎにまわつていっただけ、東陽小の井上校長と熱っぽく話を交わしていた。聞けば、お二人はある中学校で、生徒指導で苦勞を共にした仲だということである。かつて手を焼いた生徒が、私の退職を聞

きつけてきて、何をやめるんだと大泣きをしてくれた。と鎌形先生が眼鏡の奥で目を瞬かせながらうれしそうに語るのを聞いて、思わずこちらの胸もジンと熱くなつてしまった。ご苦勞も多かったかもしれませんが、教師冥利に尽きる話だ。

▼他の学校へ転出される者の中には、高校受験対策で連日帰宅が遅れたため、ご家族も毎晩あちこちの店屋物で食事をすませて協力してくれたというあの店屋物先生の鈴木敏江先生や、光中にコンピューターを導入した際、町の対応に意気を感じて、連夜遅くまで若い先生達といっしょになつて準備を進め、専門業者でさえ無理だといった公開授業をアツという間に展開し、各方面から絶賛されたあの熱血漢鶴ノ沢正吉先生も入っている。また、光中の柴山浩恒先生は、身分を光中に残したまま、遠くブラジルのサンパウロ日本人学校へ、海外雄飛をした。その他の先生をみても、よくもこんなに素晴らしい先生が

揃つていたものだと思つた。去りゆく先生は、異口同音に光町はいい町だといつてくれた。たとえそれがお世辞でも私にはうれしかった。

▼私はみんなの間をまわつて酒を注ぎながら、ふと晩唐の詩人于武陵の詩を思い出した。

酒を勧む  
君に勸む金屈扼  
満酌辞することを須ひず  
花発いて風雨多し  
人生別離足る  
金屈扼とは、黄金製のついでについた杯をいう。  
この詩には、こんなすばらしい詠詩がある。  
このさかづきを  
受けたまえ  
なみなみつがせて  
くれたまえ  
花にあらしの  
たとえもあるぞ  
別れはこの世の  
常ではないか  
会いは別れのはじめとい  
うが、やはり送る気持ち  
は寂しい。去りゆく先生  
の方、新任地や地域での  
活躍の便りを、早く聞き  
たいものだ。